



名筆・貫名海屋

地域史研究者
三善貞司

名筆の模写と貪欲に教養を深め、書を体得

貫名海屋は、生涯理想とする書を求めて試行錯誤を繰り返し、名声に背を向け苦しみにいた尊敬すべき書家です。

彼は安永7年（1778）阿波（徳島県）藩士の次男に生まれました。通称省吾。兄の栄蔵が家督を継いだため、武士社会を離れ好きだった絵師になろうと考え、狩野派の矢野典博に師事して画法を学びます。

あるとき観潮院という寺で見事な山水画を見て感嘆し、どなたの絵ですかと尋ねると、住職がこれは明（みん）14〜17世紀ごろの中国の王朝（の画家銭叔宝の作で、南画）この時代に流行した文人画（と呼ばれるものだ、と教えます。

絵は阿波の豪商西宣行（のぶゆき）が寄贈してくれたと聞いた省吾は、さっそく宣行を訪ね、銭叔宝にぜひ会いたい、すまないが旅費を貸してほしいと頼みます。宣行は大笑いして、「とつくの昔に亡くなられた方々。それにお前さん、南画をやるにはまず書道の心得が要る」と諭（さと）します。

それからの省吾はあちこち放浪の旅に出て、名のある書家を探して指導を乞いますが、どうしても納得のいく字を書くことはできません。自分には才能がない、南画どころかまともな字も無理だ・・・と絶望した彼は、世を捨てようと高野山に上がり、出家を志します。

ところがここで空海（弘法大師）の書と出会ったのです。眼にはりついていたらつらごととれるような思いで、昼も夜も空海の書の模写を始めます。誰もがあきれほど模写を重ねて、高野山の学僧たちも本物と区別がつかないほど上達した省吾は、やっと自分の字を書こうと模写のほんの一部を崩したところ、見るも無惨な下手くその字になりました。字はバランスを失って、正視できないほどの哀れな姿で泣いています。

なぜだろう、なんでこうなるのや・・・と涙を流して苦しんだあげく、はっと気づきました。空海と自分の差は、学問・教養の有無にある。まず学問・教養を身につけねばならぬ。こう考えた省吾は山を下り、大坂へ来て評判の学問所「懐徳堂」（三宅石庵が始めた江戸時代の日本最高学府。大坂の学者・文人たちから商家・町人たちまで学ぶ。跡地＝中央区今橋4丁目）に入学しました。

貫名海屋と名を改めた省吾は、猛勉強をして、秀才ぞろいと言われた懐徳堂で塾頭（門人の代表）になります。さらに詩文から絵画・篆刻（てんてく）（木石や金属に印を彫る工芸）まで学

び、「我が国で文雅両面を備えた者は海屋だけだ」と賞賛されます。古書に「天資温厚風雅」と記されていますから、奇抜なことをして目立とうとする個性派の多い懷徳堂でも、おだやかで円満な人柄だったようです。

それでもまだ満足できる書は書けません。このままいけば大学者になったでしょうが、海屋は懷徳堂を退学し、ふたたび旅に出ます。身につけた学問・教養をとおして、もう一度空海の模写を試みようと思ったからです。

いや、空海だけではない。空海が影響を受けた漢や魏(中国の古代国家)時代の碑文の拓本を所有する神社や寺院があると耳にすると、押しかけて模写させてくださいと懇願します。公卿や宮様が秘蔵していると知らされると、あらゆるつてを頼って門前に座り、地に額をこすりつけて頼みました。

文章では書けぬほどの苦労を重ねて、「刻苦精励、つひに一家をなし、名声世に顕る」と古書に記されていますが、海屋が満足できた字が書けたかどうかは分かりません。狩野派に始まり、南画・空海・漢魏の書と遍歴した総合芸術が、海屋のめざした書の世界だったからです。

晩年海屋は京の岡崎に住み、畑を耕し野菜を作って暮らしました。ある日、ボロの農衣を着て泥まみれになって働いていると、大坂から飛脚がやってきて、「お前さんに手紙を届けると頼まれた。どうせ字が読めないやろから、わしが読んでやる」と、あちこちつまりながら読んでくれました。海屋はにこにこしながら、「へえー、おおきに」と聞いていたと言われます。元治元年(1864)没。当時としては珍しい高齢で、86歳でした。

朝日新聞の創刊に尽力した村山龍平の妻満寿の実父小林卓斎は、海屋がもっともかわいがった門人の一人です。龍平は古書画の収集家としても知られますが、それはこの岳父の影響です。夫婦の長女村山藤子が長年館長を務めた「香雪美術館」の収蔵品は、龍平のコレクションが中心です。

海屋の書が見たい・・・と思われる方には、大阪天満宮(北区天神橋2丁目)の参拝をお勧めします。本殿右の絵馬掛け棚の左にある燈籠に、

「長明燈 元治紀元甲子九月吉日 八十七 貫名苞敬書」

と刻まれているのがそれです。「苞」は彼の別号。八十七は数え年で没年齢です。つまり死の直前の字で、値打ちがあります。また住吉大社(住吉区)の北橋西詰北入りに建つ石燈籠「長明燈」も、彼の84歳の書です。



海屋の書が刻まれた燈籠
(大阪天満宮)

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞